

平成29年度第1回北杜市子ども読書推進計画策定委員会会議録

- (1) 会議名：平成29年度第1回北杜市子ども読書推進計画策定委員会
- (2) 開催日時：平成29年8月24日（木）午後1時30分～午後3時
- (3) 開催場所：大泉総合会館 会議室5
- (4) 出席者：策定委員 溝口 たみ子／松村 まさ子／柴山 裕子／山本 麻依子／佐野 恭子
桜井 彰一／市瀬 真／高橋 達郎／田中 和美／浅川 希久子
進藤 わかな／中田 治仁／小尾 正人／加藤 寿
教育委員会 堀内 正基（教育長）／井出 良司（教育部長）
事務局 坂本 あけみ（図書館長）／深澤 寛美・小野 まどか・相吉 悠（総務担当）
- (5) 議題： 1) 「北杜市子ども読書活動推進計画（第三次）」の策定経緯について
2) スケジュールについて
3) 「北杜市子ども読書活動推進計画（第二次）」の成果と課題について
4) アンケート調査（案）について
5) その他
- (6) 公開・非公開の別：公開
- (7) 該当なし
- (8) 傍聴人の数：0人
- (9) 審議内容
委嘱状及び委任状交付の後、役員選出が行われ、会長に松村委員、副会長に桜井委員が決定した。

議 題

- 1) 「北杜市子ども読書活動推進計画（第三次）」の策定経緯について
 - *事務局より資料をもとに策定経緯について説明
 - ・北杜市では、合併して北杜市図書館が誕生して以来、平成16年6月に旧須玉町で策定した「須玉・子ども読書プラン」を基本方針（第一次）として、子どもの読書活動を推進してきた。
 - ・その後、子どもを取り巻く環境の変化に伴い新たな方針が必要となり、平成24年度に「北杜市子ども読書活動推進計画（第二次）」を策定した。平成25年度から平成29年度までの5カ年計画として、子ども読書をさらに推進するべく今日まで取り組んでいる。
 - ・引き続き子ども読書活動を推進して行くために、現計画を基本としてこれまでの取

組みの成果と課題、平成29年度9月に実施予定であるアンケート調査の結果をもとに、「北杜市子ども読書活動推進計画（第三次）」を策定する。

2) スケジュールについて

*事務局より資料をもとに計画策定スケジュール（案）について説明

- ・ 8月24日 第1回策定委員会
- ・ 9月中旬 市内学校・保育園等にアンケートの配布
- ・ 10月下旬 第2回策定委員会
- ・ 12月中旬 第3回策定委員会
- ・ 平成30年2月初旬 第4回策定委員会
- ・ 平成30年2月 教育委員会に提出・承認
- ・ 平成30年3月 告示

委員：山梨県で「第三次子ども推進計画」が策定されたようだが、資料がほしい。また、山梨県の第二次と第三次の策定の違いがあれば教えてほしい。

事務局：県の第三次についての資料は次回の策定委員会で配布する。

部長：第三次は第二次を評価するものである。県と市の計画とは若干違うところはあるが、県では第二次で「計画目標数値」を示しており、第二次までの進捗状況をふまえて、第三次では第二次の上に行く計画や数値目標を定めている。取り組み内容については概ね再掲が多い。これまで進めてきたことを評価し、継続やさらなる充実をする中で、目標数値を上げている。

委員：平成30年2月に告示となっているが、どのように発表されるのか。

事務局：平成30年2月の定例教育委員会に提出し、承認を得てから告示となる。

3) 「北杜市子ども読書活動推進計画（第二次）」の成果と課題について

*事務局より資料をもとに説明

- ・「ほくと子ども読書の杜プランー第二次北杜市子ども読書活動推進計画ー」の具体的な方策を受けて、市内の保育園、児童館、放課後児童クラブ、小中学校、公共図書館等の機関や施設が子どもの読書活動推進に取り組んできた。
- ・第二次計画策定後の平成25年度から平成28年度まで毎年「進捗状況調査」を行い、その集計結果と現時点で把握している状況をもとに第二次の成果と課題をまとめた。

委員：ビブリオバトル全国優勝や小学校の家読などで文部科学大臣表彰を受けていることは素晴らしいことと思うが、自分はそのことを知らなかった。もっと周知

やアピールをしてはどうか。

事務局：受賞については市政報告会で発表がある。図書館で受賞した場合は図書館のホームページで、学校で受賞した場合は学校のホームページでと、それぞれのホームページに掲載している。

委員：のぼり旗や街角に立つなどしてもいいのではないか。

会長：「みなさんに知っていただく」ということを心がけたほうが良い。ホームページを見られる方が多くなったとは言え、情報を知らない方も多い。のぼり旗や立て看板など、地味な方法でも良いので情報発信したほうが良い。

教育総務課長：今年度、長坂小学校の家読の取組みが文部科学大臣表彰を受賞した。市の広報誌でも記事を掲載したが、確かに露出が少ないとは感じており、周知の方法は今後の課題である。どのような方法がPRに適しているか、学校としても考えていきたい。

委員：新聞を開くと図書館や市内学校の受賞記事が載っていて、そこで初めて知ることが多い。北杜市の図書館活動を素晴らしいと思って見ているが、今回この策定委員会に関わったこともあり、今後さらに読書や図書館に関することに注目して情報を見erと思う。自分自身のアンテナを高くすることも大切なことだと思う。

事務局：一般の方にも目に見える形で周知を工夫していきたい。

会長：喜びは表現したほうが良い。

委員：資料p.11に「金田一春彦記念図書館が、平成25年度に子どもの読書活動優秀実践図書館・文部科学大臣賞を受賞した。」とあるが、北杜市図書館として受賞したということではないのか。ブックスタート事業は北杜市全体に関わる事業で金田一春彦記念図書館だけで行っているのではない。この表記には違和感がある。

委員：ブックスタート事業だけで評価されたのではないということではないか。

事務局：指摘の部分を精査して次回の資料に反映する。

委員：今のブックスタートでは、健診時に子どもに1冊の本をプレゼントして、読み聞かせやおすすめ本の紹介をしたり、図書館のPRをしたり、子どもの読書がいかに大切かということを親御さんに伝えているということによろしいか。ブックスタートの予算はどのくらいか。また、図書費についても以前と比べて、増えたのか減ったのか教えてほしい。

事務局：ブックスタートの活動については、そのとおりである。ブックスタートは北杜市になった当初は2冊プレゼントしていたが、現在は1冊をプレゼントしている。北杜市では8冊の中から1冊選べるようになっており、県内でも珍しい。

他自治体では、選べる本の種類が少ない場合が多く、市外から転入してきた保護者には好評をいただいている。その子に合った本を選んでもらい、親子のコミュニケーションを楽しんでほしいという願いを込めてプレゼントしている。

部長：補足であるが、山梨県の平成28年度から平成33年度までの第三次計画において、ブックスタートを実施している市町村は74.1%であり、残り約25%の自治体では実施していないとある。北杜市の達成率100%の数字を単純に見ると、今の状態を継続・充実させていくことが必要という数値を示している。県は平成33年度までの計画でブックスタート事業の実施市町村を74.1%から82%まで上げたいとしている。北杜市の計画においても、このように具体的な比較数値を出していきたいと考えている。

委員：ブックスタートは予算が少なくなったとしても、ずっと続けていってほしいと思っている。

館長：予算の増減については、児童図書のみで年度別比較表はないため用意が難しいが、図書費全体の年度別比較表はあるので次回資料を配布する。全国公共図書館の報告によると、どの図書館においても予算が年々減っていく中で、住民5万人以下の図書館規模と比較すると北杜市は予算的には恵まれている。

委員：購入予算がありながら、資料p.9によると平成25年度から平成28年度までで500冊近く減っている。以前は借りることができたものが廃棄されていたこともあったため、実際には廃棄している数が多いと思われる。廃棄の基準や廃棄する量の目安があるのか知りたい。

事務局：北杜市図書館の書架に入る本の率が100%を超えている状態。新たに購入する分、書架から本を抜かなくてはならない。情報の古いものや貸出が少なくなっているものを廃棄の優先度が高いとして入替えの対象としている。

委員：廃棄されて借りられなくなった本でも、図書館のネットワークを活用して本を取り寄せて借りることができるかと認識しているがよろしいか。

事務局：そのとおりである。県内外の図書館ネットワークを利用して本を取り寄せて、利用者に希望の本を届けている。

委員：今は読みたい本が手に入らないということは、ほとんどないと思う。図書館のネットワークを使うことによって、取り寄せに時間がかかるかもしれないが、本を借りて読むことができる。廃棄基準に従うとともに、他の図書館にあるから廃棄するという判断もあるということによいか。

事務局：そのとおりである。国立国会図書館では、全ての本を納入する制度を持っているため、希望の本を近くの図書館に取り寄せて読むことができる。

委員：本の廃棄は裁断機にかけているのか。

事務局：あまりにも汚れている本以外は「ブックリサイクル」として、出来る限り利用者に提供している。

委員：某図書館で「お持ち帰りください」とあった。読みたい本がブックリサイクルに出ているなら、持ち帰ると良い。

委員：以前3,000冊入っていたものが、なぜ2,500冊に減るのか。

委員：書架に入る数ではなく、購入した冊数である。

事務局：全体の購入予算が減っているのです、一般書の購入も含め、児童書の購入数も抑えられているということである。

委員：図書館は冊数を揃えれば良いわけではなく、内容の良いものをセレクトして提供することが一番の使命である。安い本をたくさん揃えれば良いというものではない。本が値上がりしているのです、司書も苦勞しているのではないかと。

委員：資料p.9からp.10にかけての読書活動の理解促進について、「ママパパ学級開催3回に対し2回の実施にとどまった」とあるが、「開催4回に対し」の間違いではないかと。

事務局：平成26年度と平成27年度は4回開催されたが、平成28年度には3回開催され、そのうち図書館職員が参加したのは2回という意味である。

委員：4分の4、3分の2という書き方にしてはどうか。

事務局：承知した。

委員：資料p.9にある「児童資料の網羅的収集」の網羅的収集とはどういう意味か。

事務局：児童図書の中でも様々な種類を収集するという意味である。

委員：子どもの本は大人の本に比べると出版数が少ない。予算がたくさんある図書館では、その年に出た良い児童書はなるべく購入するようにしている。市の図書館が子どもの本を全て買うのは難しい。

委員：読み物だけでなく、コミックや図鑑なども含めて幅広く集めるという意味で「網羅的」という表現をしている。

部長：資料p.9からp.10にかけての読書活動の理解促進について、「平成28年度は、図書館職員の人数確保が厳しく対応ができなかったため、ママパパ学級開催3回に対し、2回の実施にとどまった」とあるが、この文言を抜いてもよいのではないかと。推進計画に対しての評価であるので、図書館職員が出向いたか否かの評価ではなく、読書推進をするための事業がどのくらい行われたかどうか実績のみで判断するのが適正ではないかと。図書館職員が2回しか行かなかった、という表記は不要ではないかと。

委員：この文言は混乱を招くので不要である。

事務局：承知した。

部長：純粋に実績状況とそれを評価するものであると捉えて資料を作成する。削除し

た文言を受けて、第三次計画の中では、職員を充実するべきだという意見をいただければありがたい。

委員：図書館で一番大事なのは、資料と人と施設。一番大事なのはそこで働く図書館の職員である。

会長：成果と課題については、記述の文言よりも表や統計を重視していく。

委員：図書館協議会で「進捗状況調査」の結果報告を受けているが、障害のある子どもへの読書活動の支援がどの施設でもされていない。第三次では実施できるような計画を考えてほしい。取組みがされていないので成果と課題には載っていないが、大事なことなので省略しないでほしい。「取り組みなかった」という表記でもいいので載せてほしい。

事務局：掲載すべき部分を省略してしまった。重要な部分なので、次回に反映する。

4) アンケート調査（案）について

*資料をもとに事務局から説明

- ・第二次で実施していたアンケートとの変更点は大きく2点。「保育園保護者用」アンケートにブックスタート事業に関連する質問を追加したこと（ブックスタート事業の効果を把握するため）、「高校生用」を作成したこと（勉強や部活に追われて読書の時間がとれないと聞くが、その実情や解決策を知るため）の2点。
- ・「小学生用」「中学生用」については変更なし。
- ・委員は案を持ち帰り、修正等があれば赤字を入れて事務局が送付する返信用封筒に入れて返信する。

委員：保育園に行っていない子もいるが、アンケートの回収はどうするのか。幼稚園に行っている子もいる。

事務局：市内に幼稚園はない。市内の保育園が対象である。

委員：「森のようちえんピッコロ」に行っている子もいる。葦崎市の幼稚園に行っている子もいる。全ての意見が反映できないことについて考える必要があるのではないか。

子育て応援課長：市内の子どもが市外の保育園や幼稚園に通っているケースは多い現状だが、市外の園に直接調査を依頼するのは難しい。手に取れる場所にアンケートを設置することはできるのではないか。

委員：「森のようちえんピッコロ」は市内であるため、アンケートの対象にしてもよいのではないか。

子育て応援課長：市内であれば直接送付ができる。

委員：アンケート調査をしているということが、対象外の学校に通っている子にもわかるようにしたらいいのではないか。

事務局：市の図書館の取組みとしてどこまで調査するか検討する。

委員：「森のようちえんピッコロ」は市内から通っている子がほとんどである。アンケートの回答があると良いと思う。

部長：基本的には市内の施設に限る。全ての北杜市民である子どもたちから意見が聞けることがベストであるが、アンケートの回収漏れが出てしまうのは致し方ない。アンケートをとる母体を保育園から学校までとすると、中学校や高校になるにつれて市外から来ている子どもの混在が多くなる。ターゲットを「市民」に限定するとまとめづらいため、「市内の保育園、小中高校」に限定して実施するというご理解いただきたい。

以上